

# 朝日高の先輩は、後輩たちに何を訴えてきたのか

平田 善久

## 1 はじめに

本校は、令和5年11月、創立149周年記念式を開催し、現在150年目を迎えている。

150年という歴史は全国的にも屈指の長さだが、創立以来、格調高い校風と高水準の教育を維持し、4万人を数える同窓生の皆さんが、各界・各分野で広く活躍されていることは、本校の誇りとするとところである。

同窓生の中には、「日本の現代物理学の父」と呼ばれる、仁科芳雄博士、日中国交回復に尽力された、岡崎嘉平太氏など、世界や日本をリードしてきた方々がおられ、毎年開催されている創立記念講演会では、錚々たる先輩方が記念講演をしてくださっており、このような素晴らしい体験ができることは、本校ならではの、というべきものである。

本稿では、諸先輩方が創立記念講演で、自らの経験、経歴、信条を踏まえて、母校の後輩に対して、何を、どのように訴えられてきたかということ、創立150周年を前に、岡山朝日高校の伝統とその在り方を改めて見つめ直すきっかけとなるように紹介したい。

幸い本校には、毎年の講演が校誌『烏城』に収められているほか、その講演を再編集した『創立120周年記念講演集 進取』（平成6年）、『岡山朝日高等学校創立140周年記念 岡山朝日高等学校講演集II』（平成26年）が刊行されている。『進取』、『講演集II』に掲載された11の創立記念講演の文面を追い、

- ① 演題設定の理由について直接言及された箇所
- ② 「諸君は」「皆さんには」など、後輩への訴えかけのある箇所
- ③ 繰り返し述べられた言葉のある箇所
- ④ 「重要」「必要」「大切」「ポイント」等を使って強調された箇所
- ⑤ 講演のまとめとして語られた箇所

に着目して取り上げ、その観点ごとに上記の番号を付して番号順に並びかえてみることにする。

結果として、それぞれのご講演で時間をかけて語られたご専門に基づく内容についてはあまり触れることができず礼を失することになるが、深みのある講演全体についてはこれら二つの講演集、また150周年を機に新たに発刊予定の講演集を実際に手に取って十分に味わっていただきたいと思う。また、取り上げる点は、筆者の主観を通すため、ご講演者本人の意図が必ずしも十分に汲み取れていないおそれもあるが、そのことに関しては力量不足とご容赦いただきたい。なお、文体については、講演中敬体で表現されていたものも、すべて常体で表現した。

## 2 それぞれのご講演から

◎仁科 芳雄 氏（明治43年岡山中学校卒業）昭和24（1949）年 創立75周年記念講演  
演題「我等の行手」

- ①（戦後の経済復興が必要な時期にあたり）「我々は四つの島に閉じ込められ」ており、「これに8000万人が生活し、「ともかく食っていかなば」ならず、「私は我々が今後何を為すべきかということについて、深く思いをいたさなければならないと思った」ことが、演題を掲げた理由とされた。
- ②「我々はまず生きるということによって、すべてのことが始まる」が、「我々はこの社会の大きな生命」などを「頭の中において、毎日の行動を行うということと、そうでなくただその日その日のことを考えて送る、あるいは自分のことだけを考えている、そういうことを続けていくのとは長年の間には非常な差が出てくる」。「諸君は今後この日本を背負って立つべき人」であり、「今後

の日本がどういうふうに進んでいくか、これはすなわち諸君の考え次第で、「我々がやっていることは、長い生命を持つ社会を作るべくこの肥しとなるべきことをやっている」のであり、「諸君も同じような考えをお持ちになるよう希望する」とされている。

- ② (戦争を総括する項で)「我々がいろいろの問題について不利であろうとも我慢して、「道義的外交を確立すること」によって「我々が始めた戦争の責任というものを解消することができる」のであり、「諸君は我々の年頃の者が始めたこの戦争の責任を負わなければならない」。「我々は生命の流れに生きており、社会の生命は長く続くもので、決して一時代ですべてのことが終わるものではない。どうしても諸君はそういう我々先輩の行った罪悪に対して、それを解消せしめるというだけの努力を払う必要があるため、「我々は、日本が諸外国の間においていかに処すべきかということを今後考えていかねばならない」と述べられている。
- ⑤ (アジアの中の日本として)「我々は、結局インド、支那 [中国]、ビルマ [ミャンマー]、シヤム [タイ] という国の間に存在して」おり、「我々はこういう国が今後経済的に栄えていく、また文化的に栄えていくことにあらゆる努力を払う必要がある」あって、「そういう各国が文化的にも経済的にも栄えていくということがあって初めて日本の経済、日本の文化が進んでいく」のであり、「決してこの一つの国だけが栄えて他の国が栄えていないということは考えられない」。「道義的な考え方によって、日本だけという利己的な考えを捨てて、まず人を富ませて然るのちに自分も富む」という考えに基づいて「諸君は今後、日本の運命を握っている。どうかこの日本が今後誤った道を踏まないよう、正しき道を真つすぐに踏んでいくことに努力するよう希望する」と締めくくられている。

◎富久 力松 氏 (大正6年岡山中学校卒業) 昭和39 (1964) 年 創立90周年記念講演  
演題「成功の秘訣」

- ①②「世の中がいかにも変わろうとも、ゆるぎのない原理原則というものがある。それは多くの先輩たちが、苦勞し失敗を重ねて築き上げた性質のものであって、いつの場合でも、原理原則に立ち返って物事を判断し、我々の目的を見失わないようにすることが、一番必要である」と前置きされた上で、「我々は世の中のために働くのが義務である。皆さん方がこういう考えを持ち、向上心に燃えている人であって初めて世の中は進歩する。皆さん方をお願いしたいことは、自分は何もできないのだという考え方ではなしに、いつの場合でも自信を失わず、向上心を燃え上がらせてもらいたいということだ。その結果として、成功に結びつく」と述べられている。「成功には何が必要か」といふと、知識、経験、それに創造的な考え方の三つの要素があり、この三要素を働かせて新しい考えが出てくる」と講演を始められている。
- ④ (知識、経験の重要性に触れられた上で)「一番高級で重要な考え方は、いわゆる創造的な考え方」であり、アメリカの著作から「右手に水さしを持って左手の海綿に水を注げ。すると海綿は水を吸えるだけ吸い、さらに注入を続けておると、必ず水滴がしたり落ちるような状態になる。その水滴がしたり落ちるといふことが、創造的な考え方なのだ」と引用され、「一つの目的を持って長い間粘り強く知識と経験を頭の中へ注入していると、必ず誰でも創造的な考え方は浮かんでくるものだ」とされ、「自分には知識があるからといってうぬぼれていては、創造的な考えは出てこない。自分は鈍才であるという気になって、粘り強く続けるということが創造的な考えを生む一つの要素だ」と述べられている。
- ⑤「結局何が成功かと言えば、晩年になって『我が人生に悔いなし』ということに尽きる」と繰り返され、「自分は人類のために何がしかの貢献をしたという誇りを持ち得ることが、一番の幸福」であり、「H先のものでなく、本当に自分の知識を養ってほしい」。そして「年老いてから『悔いなし』といえるようになるためには、若い時から始め」なければならず、「皆さん方は春秋に富み、

まだ『人生長し』と考えているかもしれないが、「基礎を作る時間、働ける時間というもの、そう長くない」ので、後悔のないよう「今から努力してもらいたい」と講演をまとめられている。

◎葉上 照澄 氏（大正9年岡山中学校四年修了） 昭和43（1968）年 創立94周年記念講演  
演題「プライドとファイトを」

- ②（「回峰行」に触れながら坊主頭への誇りについて）「この『行』に入ると頭を剃らないといかんだ。端的に言ったら『命をかけて致します』という証拠だ。命をかけてやれば何でもできる」と述べられ、「私の現在の心境は君達がしっかりしてくれること、これ以外に望みはない。まして、君達は最も愛する母校の若い人達だ。あとのことはどうでもいい、声を大にして言いたい。『若者よプライドを持って』と。プライドなき時は墮落あるのみだ」と語られている。
- ②（自身の念願に触れられ）「行って見て日本人の墓があったら、それを乗り越えてゆくというふうに、若い人達が夢をもってほしい。将来のことだからどうなるかわからないが、これだけの夢を持っている。まして君達が夢なくて何の人生ぞやと言いたい」と述べられている。
- ③（学習について）「基礎からでき、それを応用したら何でもないのだ。だから今からでも遅れじゃない。基礎からしっかりやり直す」ことが大切であると記憶力が旺盛な時代に基礎的な力を付けることの重要性について強調されている。
- ③（自身が51歳で毎日84キロ歩いたことに触れられ）「つまり人間は覚悟が大事だということだ。よしやってやろうとファイトを燃やしたら必ずやれる。私に言わずならば、『ファイトなき者は去れ』だ」と繰り返されている。
- ④「私は今比叡山にいるが、学問を尊重しない、学問と初めから矛盾するような宗教は嫌いだ。しかし学問だけですべては解決せず、人間には心の作用がある。それで今は宗教界に入っているのだ」と人間には学問と心の作用が共に大切であることについて述べられている。
- ⑤（生死ぎりぎりの限界線へ自らを追い込んでいったところに科学を超える世界があることに触れられ）「少なくとも人間、ようしと覚悟したら、突破できる。それぞれの立場でね。いろんな条件を考える必要はあるだろうが、以上のような世界があるということなら、『もっともっと勇気を出せ』ということ、これが私の言いたいことだ。まして本当に期待し、一番愛している君達、どうぞしっかり頼みます」と締めくくられている。

◎岡崎 嘉平太 氏（大正5年岡山中学校卒業） 昭和59（1984）年 創立110周年記念講演  
演題「私の生涯の道を決定した先輩・友人の話」

- ①「私は、生涯のうちで、いろいろな先輩・友人から教わったこと、そういう人によって私が啓発されたことの一部を話して、皆さんの参考にして」もらいたいと講演を始められた。
- ②③「皆さんにお願いしたいのは、殊に学校を卒業して世の中に出ると情報をたくさん知ることがなるが、その情報をどう扱うか判断を間違えないようにすることが大切」で、「私は、藤井（較）大将の話から、情報を読むためには広い知識がなければならないとつくづくと感じた」と語られ、「皆さんも何が今、日本で、岡山中で、世界で起こり、どう進んでいるかだけは、一通り頭にたたき込むようにする習慣をつけておくとよい」。「新聞を大雑把にでも全部目を通すことを習慣にされるよう」にと新聞を読む習慣について繰り返された上で、「皆さんが、私のような年になって、『ああやっぱりよかった』と思えば、皆さんも130年あるいは150年祭に、ここへ来て若い後輩の学生に話をすることがあるだろう」、「私は、藤井大将の話は非常に勉強になっており、深く感謝しているため、それを皆さんにお伝えしたいと思ひ話した」。「皆さんがこの（藤井大将の）教訓を頭において情報社会になる今後の社会の世界の中で、立派な判断をされることを希望してやまない」と現代の情報社会を予測された上で、その社会で活躍する後輩への期待を述べられた。

②③ (氏が人生の師と考える周恩来の話をされた上で)「皆さんも、人の身になって考える、相手の立場に立って考えるというモラルを、何かにつけて自然に発揮できるように修養していただきたい。そうすれば、自分の気持ちも非常にすがすがしくなるし、また人も尊敬してくれる、仲良くしてくれる。先輩、後輩、友達から言われたことが皆さんの一生を随分プラスにする。」「皆さん、友達と仲良くし、人に対して親切、そして何か困った問題の時は相手の立場に立って考える、相手の立場を尊重する人間になってもらいたいし、「本当に立派な人間になってほしい。それは金持ちになるとか、総理大臣になることではなく、誰からも喜ばれる人、誰にも親切をして、その親切が人の生命を生かすようなものであったら、皆さんがだんだん年をとるに従って、その親切が自分の喜びにもなってくる。どうかそういう人になっていただきたい」と繰り返し述べられている。

◎藤田 温 氏 (昭和 17 年第一岡山中学校四年修了) 昭和 59 (1984) 年 創立 110 周年記念講演 演題「技術の進歩とこれからの社会」

②④「岡山一中に入って有難かったのは、非常に風格のある先生方が多かったということ」で、「師弟関係は礼節と規範を保ちつつも、敬愛をこめた人間関係が育まれていたように思う。現在の朝日高校にもその伝統は残っているようで、先生と皆さん方が人変明るくて良い関係にあるという話を昨晚聞いて喜んで」おり、「そうした人間関係というものは、教育の場では大事なこと」であると述べられている。

⑤ (過去から 21 世紀へ技術進歩を展望された後)「新しい社会を生きていくにはどういうことに注意し、考えたらよいか」について、「これからの時代は、まず個性化、多様化」が「今後も進んでいくことは間違いない」。そのため、「今までは、自分の専門領域を徹底的に深く突っ込んだ I 型人間というのが、非常に貴重な人材だったが」が、「これからの時代は、専門領域に加えて、自分の周辺のいろいろな領域のことを幅広く理解できる、専門家ほどではないけれど理解できるし、理解しようと努力する T 型の人間が必要」になり、「そういう生き方が求められる」。そして「一方では成熟化、高齢化と言われている」が、「成熟化というのは、先進国共通の問題で、物があり余ってきて、物離れの時代、つまり物よりも知識とか情報といったようなものの価値が出る時代であり、物に付加されているいろいろな価値、情報価値といったものに注目する必要」があり、「炭するに、これからの時代をスマートに生きるには個人生活と社会生活とをうまく調和させていくことが必要」である。「いろいろな情報に基づく新しい知識がどんどん入ってくるが、私達には、その新しい知識を生かす新しい知恵が求められる時代になるように思う」とまとめられている。

◎海田 能宏 氏 (昭和 33 年岡山朝日高校卒業) 平成 3 (1991) 年 創立 117 周年記念講演 演題「アジアと日本」

① (日本の ODA が世界第 1 位になったことを踏まえ)「なぜ援助するのかと聞かれて、私は『自分たちの生き方を学びとるために援助しなければならない』と一見間違いの答えをする準備ができていたのだが、このことをこの講演ではとくと言いたい」と講演を始められている。

④ (エネルギー需給のバランスが問題であるかぎり)「バングラディッシュがエネルギー消費量を 2 にするとき、私たちは私たちの使用分を 75 に、向こうが 10 にすれば私たちは 67 にしなければならない。エネルギー使用の絶対量を増やさないようにするには、我々の方が譲らざるをえないのだ、という私の言わんとするところは分かってもらえると思う」と訴えられている。

④「私が話していることは、『無駄をはぶけ、贅沢をするな、謙虚たれ、神を畏れよ、分かち合えよ』」であり、「宇宙船地球号の未来を心配し、アジアの人たちの謙虚な暮らしぶりをつぶさに見た者として、自信を持って言える唯一のことは『謙虚に生きようではないか』という一言」で、「『開発研究』とは遅れた所に近代技術を適用する仕組みを考えるのでは決してなく、開発の対象となって

いる彼らの生き方を私たちの方へ照射し、我々の生き方を反省し、開発の果実を分かち合う、その仕組みを考えることにほかならないと、ようやく想い至った」のである。「皆さんの将来の仕事は、どちらかというスタッフの仕事で、一人立ち、協調、職場を固定させない、広い視野をもつことなどがキーワードになる職種であろう」から「若い時代の一時期外国で働くのも得にはなれ損にはならない。アジアと交流して、生き方を学ぶのは、若者にこそ期待したい。あなたたちの将来は、そういう機会に満ち溢れている。大げさに言うと、あなたたちをその気にさせなければ、小はODAを推進し、中は国際交流の実をあげ、大は日本が真に国際化することはできない」と後輩たちへの期待を述べられている。

- ⑤「アジアで、どのような形にせよ、暮らして、働いて、何か貢献したいあなたに必要な条件はたったの五つ」で、「その一は旺盛な好奇心、その二は自分と違う生き方をそれはそれとして受け入れる心の持ち方の広さ、その三はある専門分野を持ち一人前になっていること、その四は英語とあと一つその国の言葉を自由にあやつること。英語は国際共通語として相当程度できなくてはならない。その五は頑健な体とものおじしないうつかましさと弱さをカバーして余りある克己心である。この五点を満たすか、少なくとも満たそうとする気になること」と国際貢献に向かう人材としての心構えを述べてまとめとされている。

◎三谷 太郎 氏 (昭和 27 年岡山朝日高校入学・転出) 平成 8 (1996) 年 創立 122 周年記念講演 演題「学問は人生にどういう意味があるか」

- ①「学習は、既知なるものへの問いから出発」し、「唯一の正しい答えが存在することが前提」となっているが、「学問は、未知なるものへの問いであり、その答えを求める過程であるが、唯一の正しい答えが存在するか否かが知られていない。「学問の問いに対する唯一の正しい答えは、おそらく極限值としてのみ存在し、答えは常に近似値」で、「学問的真理とは極限值であって、学問は極限值を求める無限の接近の過程なのだ」とされ、講演に人られた。
- ②③「受験勉強は典型的な学習」であり、大学生活への不適應が生じないように、「受験勉強、学習の先に学問があることを受験者本人が知ること」の大切さを述べられ、「授業を通して受験勉強を助けると同時にその限界を知らしめ、未来を指し示すことが、今日の高等学校教育の役割」で、「私が当時受けた教育は、受験勉強後の学問への意欲を強く刺激するものであった」と述懐されている。もちろん、「受験勉強は、皆さんにとって決して無意味なものではなく、人間の生活にとって必要な自己管理・自己規律を教え、「自己を確立していく」のであり、「一見、自由に対する拘束のように考えられるが、「自己抑制も自由の一つの側面だ」と述べられている。
- ②④「内面と外面とが釣り合った高い水準の学問を担う人間に『人望』は集まると福沢は述べて」おり、『人望』がなければ人間はそれぞれの『職分』(社会的役割)を果たすことはできない」とされ、「皆さんも近い将来立派な職業人として『職分』を果たすことを求められることになる」と述べられた後、「立派な職業人は高度な専門的技術を身につけるとともに、内面化された職業倫理により行動し、場合によってはそれに殉ずる」もので、「真の職業人にとって技能は倫理と不可分であり、少なくとも倫理に反する行為をした人が『人望』を得ることはありえない。「倫理への帰依こそが真の職業人(プロ)と非職業人(ノンプロ)とを分かち最も重要な基準ではないかと考える」と職業倫理の重要性を強調されている。
- ⑤「人間の尊厳は個々の人生の絶対的価値に根ざしている。学問は、それぞれの絶対的価値を持つ個々の人生を内面的に結びつける媒介の役割を果たす。それぞれの人生の絶対的価値を損なうことなく、それら相互の内面的交流を媒介することによって、学問は人類の観念を現実に近いに近づけることができるのではないか。学問によって根拠づけられた『一身独立』を『一国独立』を超えて『人類独立』にまでもたらずのが『学問のすゝめ』から 120 年後の今日の学問の使命である」と

まとめられた。

◎大野 美代子 氏 (昭和 33 年岡山朝日高校卒業) 平成 19 (2007) 年 創立 133 周年記念講演  
演題 「美しい橋を創る -橋とデザイン-

- ①② (高校生活を振り返り)「アートでは、大原美術館には、時折、ピカソなど巨匠の大きな展覧会が来たが、それを見るということは、1枚の絵だけを見るのではなくて、たくさんの絵の集積を見ることで、その人のたどってきた足跡が見える」。また、「スポーツでは、バスケットボール部に属していたが、「私が今もこんなに元気で仕事をしていて、普通であれば引退している年齢なのに、いまだに現場に行く梯子を上ったり下りたりできるのも、高校時代に少し体を鍛えておいたから良かったのだ」とされている。「別の面でも高校時代に大事なことは、家族とか友人との関係」であり、「両方とも大事にしていかなければならない」とされた上で、「スポーツでは、忍耐、体力」が、「アートでは、観察する力、ものを見る力がついた。特に直感力というような、熱い、冷たいを含めて、ものを感覚的に見抜く力、動物として生きていく上での力のような、そういう意味での直感力が得られたことがとても大事」だと述べられている。
- ④ (展覧会を行った際)「ギャラリー一展を監修されている先生から推薦文を書いてくださったが、『橋というものを考えるときに、形とか色とかいう前に、まず渡る人たちへの心情が考えられている橋だ。橋という巨大な構造物に挑戦して、それをヒューマナイズした女流デザイナーたちの心意気を感じてください』とあって、これは私たちにとっては大変大事な言葉になった」と回想されている。
- ⑤ (橋の話の感想を尋ねられながら)「このようにいろいろな世界、まだ皆さんが見ていない世界があるので、ぜひ朝日高の皆さんに夢を持ってほしいと思う。いろいろな分野がある」とされ、「ただ、健康にだけは気を付けて、途中で倒れてしまうとやりたい事も続かないので、少し自分なりに鍛えながらも、是非いろいろな世界を見てほしい。そして、新たな世界に美しい橋を架けてほしい」とまとめられている。

◎山海 嘉之 氏 (昭和 53 年岡山朝日高校卒業) 平成 20 (2008) 年 創立 134 周年記念講演  
演題 「夢・情熱・人を思いやる心が未来開拓を加速する -サイバニクスの誕生-

- ①③ 「研究成果そのものを実験室とか机の上で終わらせるのではなく、きちんと社会還元していくことが重要」と「社会還元」「社会との連動」等を繰り返され、「イノベティブな成果を社会に還元するためには、法律や社会体制の整備も重要で、そういう意味では理科室だけの話ではもうなくなって、科学技術を一層進めていくには、みんなで一緒に開拓しないといけないことになっている」。『サイバニクス』については、「脳神経科学、行動科学、ロボット工学、IT技術、システム統合技術、生理学、心理学、感性、法律、倫理、経営といったものを融合、複合した新しい分野」であると紹介され、最終的には「世界から日本がいてくれてよかったと思われるような国づくりができればいい」と思っている」と思いを語られている。
- ③ (白らの少年時代を踏まえて)「夢とか目標というのは、点ではなく、そこに向かっていこうというベクトル」であり、「それがあれば、かなりのことを乗り越えられていく」ものだと言われている。
- ④ 「こういう研究を通して科学者倫理、研究者倫理、つまり科学技術がどのように使われてくるのがとても大切」であると科学における倫理の重要性を強調されている。
- ④ 「何か行動を起こしたときに、その先に何があるかを一応想像して、考えられることはきちんとやる」。そして「そうでない結果が出たときに、世間の人は、それを『失敗』と呼ぶかもしれないが、「こうやればこうなるはずだ」というパターンをいくつか考えて、考えた結果、実はやってみる

とそうでない結果が出た時は、これは『発見』だ。ここがポイントで、『失敗』と見るか『発見』と見るかというのは、背中合わせであると、予測をしっかりと立てた上で行動した後の物事の捉え方や考え方が大切であることに触れられている。

- ⑤「皆さんがまさに社会でチャレンジして貢献できるような年というのは、やはり限られて」いるので、「短い人生、せっかく生まれてきたのだから、生まれてきた限りは生きる覚悟をきちんと持って生きてほしい」。そして「志を持って、高い志で自分の心に恥じない生き方を貫くという思いでチャレンジしてほしい」。「こうしたことを頭に残して、次の時代を生きてほしい」と締めくくられている。

◎東山 一郎 氏 (昭和 20 年第一岡山中学校 4 年卒業) 平成 21 (2009) 年 創立 135 周年記念  
講演 演題「かなの話」

- ①(書作展について)「まず、作品を読もうとしないで、その作品が好きか嫌いかで見てもらいたい」。「我々が審査する時にも読んではいない。何が書いてあるかという言葉の内容ではなくて、いかに表現されているかという芸術的内容が問題」であり、「その作品があなたに何らかの感動を与えるかどうか最初の問題なのだ」と書作品の見方について強調されている。
- ④「私の人生は U ターン連続だった」が、「言えることは、どんな逆境に出くわしても、決してあきらめなくて、その時、その時を精一杯生きることだ」と述べられている。
- ④(「かな」の誕生について)「幸いに、平安の時代には、男性たちも女性の感性を認めて、この文字を積極的に書くようになったということは、当時の男性たちの度量と見識の然らしめるところ」であり、字の形の「飛躍は、全く逆転の発想で、あるところまで段階的に進行したものが、突然に介証法的な発展とでもいうべき質的变化を起こしたのではないかと思う。これはヘーゲルの指摘するように歴史上に多くその例を見ることができが、この過程こそかなが造形的にも漢字から脱却して、かな化という質的発展(アウフヘーベン)を遂げた重大な転機であったと言えると思う。そこでかなは単なる漢字の草書化にとどまらず、全く新たな造形として生まれ変わったのだ」と書家の観点から、かなの誕生の裏にある史実だけでは解説しきれないものがある点に触れられている。
- ⑤(外国のVIPに作品を贈るときの話を提示されて)「2、3枚お見せして選んでもらうのだが、どうせ日本語は読めないだろうし、書道もあまりお分かりになってないだろうと高をくくっていると、我々がその中で『これかな』と思っている1枚を必ずと言っていいくらい選ばれる」。「書が芸術であるからには、それを評価する基準はその人なりにお持ちになっているわけで、読める読めないに関係なく優劣を選択されるのは当然」であり、「外国へ来て作品の見方を教わったような気がした」と芸術としての書と人の持つ感性に触れられて結びとされている。

◎菅 滋正 氏 (昭和 39 年岡山朝日高校卒業) 平成 22 (2010) 年 創立 136 周年記念講演  
演題「融合する科学と工学 国際化の現状」

- ②「クラブ活動では、ESSでいろいろな人たちと仲良くなり、「要は、高校時代は部活などを通して、将来の人生の宝ともなるかもしれない友人を作れるということ」と述べられ、また進路では「皆さんも受験するときいろいろと悩むと思う」が、「とにかくあらゆる情報を集めて、自分にあった大学、分野を選ぶことが大切」であると、後輩に高校生活での助言をされている。
- ②(少数スタッフで毎日長時間加速器を運転、全国からの毎年 100 名以上の共同利用者と大学院生を支援、自らも研究という 13 年間を振り返り)「よくぞ健康を維持できたものだ自分でも感心するが、ひとつにはスポーツのおかげで、毎日、昼食の後にバレーボールで汗を流した。皆さんも頭だけでなく、できるだけ体を動かす機会を持ってもらいたい」と述べられている。

- ④「当時誰も考えなかった」実験を提案した結果、世界初の装置を「完成させて以来、これまで10年間」世界をリードしていることなどを繰り返し例示され、「科学における独創性、つまり常識を破る」「常識を疑って独自の確信で」取り組む重要性について強調されている。
- ④「貫いたのは現場主義」で、「要するに、自分自身が現場に行き、装置を触って、若い人と一緒にやるということだ。リーダーが、冷めない情熱を若者に直に示すことが現場主義では重要だ」と松下幸之助なども例示しながら述べられ、「もう一つは、世界最高の装置が完成したら世界に開放しよう、自分だけで独占しない、『研究者は国際人であれ』と白らの人生哲学を披露されている。
- ④（未来に向けて）「あなたも人類のエネルギーの寿命を決める一人でありえるということをお忘れなってもらいたい」。「資源獲得競争は、一国の一時の利益にしかならず、どこまでも人類全体のための活動が望ましい。何よりも重要なのは、世代や国境を超えたコミュニケーションである」と国際化の中で大切な観点を強調された。
- ⑤「最後にこの言葉（『一期一会』）を贈る。『その時に会う人とは、もう今生では会うことがないというぐらい、真剣な心持ちで接してください』という言葉だ。高校生活での、先生、友人との出会いもその例だ。あなたの誕生も存在も、宇宙との間での一期一会であり、毎日を大切に、こういう精神で生きていって欲しい」と結ばれている。

### 3 まとめ

以上、最初に述べた観点に基づき、諸先輩方のご講演での発言内容を取り上げてみたが、やはり、ご講演の全体像からすると引用の仕方に問題があったと言わざるを得ない。

ただ、このような取り出し方をしても、母校への愛情と後輩への深い思いや期待に溢れており、社会のリーダーとして、「高い志や夢」を持ち、未来を開拓して社会に貢献する覚悟、物事の本質を捉え、新しい社会に対峙して的確に情報を整理して正しい判断をすることや、知にとどまらず、感性や芸術性といった資質の重要性が、それぞれの方の言葉で語られていることに注目すべきである。

また、精神面でも、「情熱」や「ファイト」、「逆境にも決してあきらめない」、「粘り強く続ける」といった言葉が頻出し、合わせて体力面が充実しなければ真のリーダーにはなれないということも、ご自身の経験を踏まえて力強く語られている。我が校は引き続き「文武両道」の校風を維持すべきであることを、時代を超えて応援していただいているように感じた。

そして、最も感銘を受けたことは、あらゆる先輩方から「倫理」、そして相手の立場の尊重、親切心といった「他者尊重」の重要性が語られていることである。これらは本校の教育方針である「自重互敬」につながる態度であり、これこそ本校にとって最も大切なものであることを示してくださっている。

「謙虚たれ」。

150年の歴史の流れの前に、こうした先輩方からの言葉を宝として、私たちは、生徒、教職員が一人丸となってこれからも努力を重ねていくほかはない。そしてまた、後輩たちへこの襷を手渡していかなければならない。